

Taste of Cement



世界60ヶ国の映画祭でグランプリ34冠!

2018 ドイツ映画賞 公式セレクション
2018 シネマ・ア・オナーズ 公式セレクション
2017 ヨーロッパ映画賞 公式セレクション
2017 アジア太平洋映画賞 公式セレクション

アラブ映画批評家協会賞2018 | TRTトルコ国営放送映画賞2018 | ドバイ国際映画祭2018 | ヴィジョン・デュ・レール2017
ドック・アライアンス 2018 | カムデン国際映画祭2018 | RIDM モントリオール国際ドキュメンタリー映画祭2017
ボストン国際映画祭2018(2冠) | オープン・シティー・ドキュメンタリー映画祭2017 | メディテリニアン国際映画祭2017
ラ・ロッシュ＝シュル＝ヨン国際映画祭2018 | メディテリニアン国際映画祭2017 | フロント・ドック2018 | カッセル・ドキュメンタリー映画祭2018
オープン・シティー・ドキュメンタリー映画祭2017 | バレック国際映画祭2017 | パトリック国際映画祭2018 | アデレード国際映画祭2018 | ラムダム映画2018
バルセロナ国際映画祭2018(2冠) | MEDローマ映画祭2018 | オランダ映画祭2018 | ガベス・チュニジア国際映画祭2018
メド映画祭2018 | ホルト映画祭2018 | フラハティアナ・ドキュメンタリー映画祭2018 | ニュルンベルグ人権映画祭2018
メクレンブルク映画祭2018 | ベオグラード・フリーゾーン映画祭2018 | ロサンゼルス・アラビア映画祭2018 | メキシコUNAM映画祭2018(2冠)

セメントの記憶

Taste of Cement



Image, Sound and Story

イメージとサウンドと物語

サウンドリンク：<https://soundcloud.com/sunny-film/edited-soundpart>

高層ビルの建設現場で働く労働者たちはカメラに向かって話すことはないが、映画にはある男性のモノローグが挿入されている。

1975年から1990年まで続いた長い内戦の末、レバノンの中心街は崩壊した。

ある男が、レバノンの建設現場での出稼ぎから帰った父がキッチンに貼った一枚の絵の記憶を語る。

その絵には白い砂浜、青い空、そして風景を囲むように2本のヤシが描かれていた。その男が少年の頃初めて見た海の記憶である。

父親の手のひらがセメントの味がしたのを思い出す。父は少年に語った。“労働者は戦争が国を破壊し尽くすのを待っているんだ”

— 朝

ベイルートで働くシリア人の移民・難民労働者たちは、基本的人権すら保障されない労働環境で働いている。建設現場と労働者たちが住む地下は一つの穴で繋がっている。労働者は毎日蟻のようにその穴を出入りする。剥き出しのエレベーターに乗り込み労働者たちは地上高く登る。ビルはベイルートの美しい町並みと、真っ青な地中海を望んでいる。労働者たちはセメントを運び、カッターでブロックを切り、ドリルで壁を砕いている。労働者の目線の先を巨大なクレーンが轟音を立てながら横切る。

— 夕方

燃え盛る夕日がベイルートの海に沈んでゆく。夜の街を光が灯す。家族のもとへ帰るため町を背に渋滞の列をなす車のヘッドライトが揺れる。ベイルートの美しい夜景は労働者たちに一日の終わりを告げる。労働者たちはいつもの穴を通り、まるで巣のような地下へと帰る。ここで働く労働者たちは、手のひらのシワがすり減る頃、地下での生活が何日目になるのか数えなくなる。街には“午後7時以降、シリア人労働者は外出禁止”と書かれた大きな横断幕が張られている。

— 夜

地下は雨漏りで水浸しになっている。電球の明かりがその水に反射している。労働者たちは食事を囲みテレビをつける。スクリーンにはレバノン国境で追いつ返されるシリア人の映像が映し出されている。スマートフォンをスワイプすると空爆で破壊されたアレッポ市街の画像が飛び込んでくる。テレビのニュースは拡散するシリア人難民への差別問題や、ダマスカスで政府軍によって使用されたとする毒ガス兵器で苦しむ少女について報じている。

カメラは労働者の瞳にクローズアップする。労働者は祖国が空爆されている映像を瞬きせず見つめる。その横にはベッドで寝ている労働者がいる。空爆の轟音は夢と現実の狭間で途絶えることなく鳴り響く。一人の労働者が電球を回し、灯りを消して労働者たちは床に就く。

—

男の記憶

立ち上がれ息子よ。僕はドリルの轟音に意識を取り戻した。しかし身体を起こすことができない。声も出せない。体は家の瓦礫に埋もれている。口の中は瓦礫でいっぱいだった。目も鼻も瓦礫で埋め尽くされていた。遠くから人の叫び声が聞こえる。誰かいるか？ 皆が一日中ドリルで瓦礫を削り僕を発見した。セメントが僕を丸ごと飲み込んでいく。私は死んだ。セメントの味が僕の心を蝕んだ。

—

朝

内戦が終わったベイルートの人々は、朝工事の音で目を覚ます。労働者たちはシャワーを浴び、髭を整え、寝袋を丸める。ヘルメットを被りいつもの穴を登りエレベーターに乗り込む。20、21、22階。新しい一日は昨日と全く同じ一日だ。12時間地下で暮らし、12時間地上で働く。その上にベイルートがのしかかり労働者たちを24時間支配している。

—

イメージ

労働者はベイルートの街を眺める。ビルの鉄骨は窓となり労働者たちと街の唯一の接点となる。屋上からは海も、空も、街も見渡せるが、労働者たちはどれもつかみとることができない。ベイルートの街は高いビルで埋め尽くされている。戦争が終わり急速な開発に沸くベイルートを上空から見つめる労働者の目は虚無的だ。

—

男の記憶

父がベイルートから戻って来た。僕は駆け寄ると父の手を握り抱きついた。抱きついた父はセメントのにおいがした。旅する人のおいだと思った。何年も海外の建設現場で働いた父が、帰国してシリアに私たちの家を建てた。セメントのにおいはずっと消えなかった。それから数ヶ月、私たちが食べるご飯にも父のセメントの味がした。その味がしなくなる頃、父もまたいなくなった。セメントは心だけでなく肌も食い尽くす。

—

イメージ

建築現場に轟音が鳴り響く。映画は戦争の映像と建設現場の無骨な映像をカットバックさせて重ねてゆく。瓦礫を踏みつけながら進む戦車の音。戦車のキャノン砲のように動くクレーン。爆撃音とハンマーでコンクリートをたたく音。飛び散るコンクリートの破片。吹き出す炎。カッターで切るコンクリートから飛び散る火の粉。破壊されたコンクリートの瓦礫。こねて造られるセメント。映画は建設現場と戦場の境界線を取り払い、二つの現場のイメージとサウンドを積み重ねていく。

—

夜

落雷がベイルートに襲いかかる。地下の電球は「ジジッ」と音をたててはその都度消えかかる。労働者たちは雷が止むのをただ静かに待っている。ブラウン管の中で年老いた楽士は歌う。「永遠というものがなくなった。残っているのは我々の思い出だけ。」労働者たちは次第に眠りにつく。

—

夢

砂埃が舞う記憶。遠くから子供の悲鳴や赤ちゃんの鳴き声が聞こえる。真夜中に男たちが懸命に瓦礫の山を掘る。一人、また一人と遺体が掘り起こされていく。懸命な捜索でようやく一人生存者を見発見する。しかしその直後飛行機が上空を飛ぶ音が聞こえる。男たちは慌てて瓦礫の山を後にする。生存者は去ってゆく救出者の後ろ姿を寂しげな眼差しで見つめる。何か言いたげだが絶望的な目で追うことしかできない。男は埃が舞う夜空

を見上げ、救出にきたヘリなのか爆撃機なのか定かではないが、何かを叫びながら両腕を宙に高々とあげている。

—

朝

労働者たちは豪雨で目が覚める。建設現場に溜まった水たまりは鏡のように労働者たちの世界をあべこべに映し出す。いつもの穴にかけられた階段にも水はたまり、階段を上る労働者は鏡の世界では地下へと降りていくように見える。その水たまりはまるで世界の二面性を映し出している。煌びやかな外面と暗く劣悪な現実。

—

イメージ

地上高い建設現場のフロアの先にはベイルートの海と街が広がりそこに眩い夕日が沈んでいく。フレームの左隅には、コンクリートを背に物思いにふけながら座っているある男がいる。

—

男の記憶

内戦が始まり、悲報が続き、近隣に空爆が落ちた。死が日常の出来事となり、次々と家が破壊された。ボロボロになって家に戻ると僕はキッチンへ直行した。母はテーブルに頭を載せ眠っている。母の横に立つと大海が広がった。僕は海と空を見つめた。絵には歳月の跡が見て取れた。15年以上も経つ。初めてこの絵を見たときのことを思い出す。

—

この海に飛び込んで二度と戻りたくないと思った。内戦へも廃墟にも。

—

手を伸ばし海に触れると波がうねり始めた。ヤシが揺れ、僕は叩きつけられた。

—

—————国外で働く全ての労働者に捧ぐ

Director's Note

ディレクターズ・ノート

ベイルートの内戦が終わり20年が経ちます。自国民同士が殺しあう祖国シリアを逃れ私はこの国にたどり着きました。新たな地で生活を始めた私は、脳裏に焼きついた暴力と死の記憶を消すため、日々あてもなくベイルートの道という道を歩きました。長い戦争は終わり、復興を遂げているベイルートですが、街のあらゆるところに砲撃を受けた大きな穴や、瓦礫のまま放置されている廃墟を目にします。その光景は、ベイルートの人々に過去の悲しい戦争の記憶を思い起こさせ、そして、私に祖国シリアで起きている忌まわしい戦争を思い出させ苦しめます。しかし、戦争で破壊された建物を覆い隠す様に生えている植物は、生命のたくましさと再生の可能性を示し私に希望を与えてくれます。

ベイルートの朝はいつも建設現場の騒音で始まります。空を見上げるとあちこちに巨大なクレーンがそびえ立っています。そして街角では多くのシリア人移民労働者が重たい建材を黙々と運んでいるのを目にします。彼らの多くは低賃金労働と衛生環境の悪い場所での生活を余儀なくさせられています。私は、基本的人権すら保障されず異国で働く同胞の取材を始めました。

ある日、シリア人労働者のコミュニティから、建設中の32階建てのオーシャンビューのビルがあると聞きました。その建設サイトには地下へとつながる大きな穴があるというのです。その地下には多くのシリア人を含む200人以上の労働者が生活をしていて、毎朝蟻のように列をなしてその階段を登り建設現場で働き、日が沈むとまた列をなしてその穴を下っていくというのです。この時代にレバノンにそのような労働現場がある事に驚くと同時に強い興味を持ちました。

長い交渉の末、ビルの撮影許可を得た私はカメラマンと内部に入りました。彼らは皆寂しげな目をしていました。建設現場の外には「シリア人労働者の外出を禁止する」と書かれた大きな横断幕が貼られ彼らの外出を阻止しています。彼らは労働が終わると地下に戻りニュースをつけ、破壊されつくされた祖国を虚無的に見つめます。

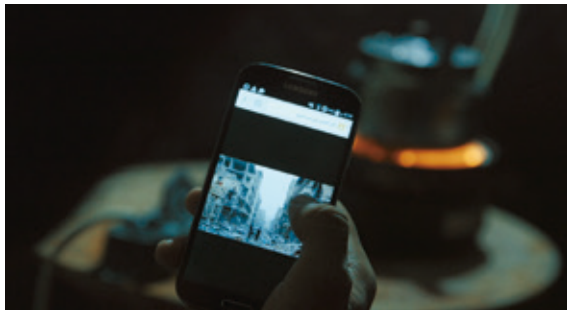
彼らはまるで巨大な牢獄で暮らしているようでした。美しい街と海は目の前にあるのに触れ合うことすらできません。シリア人労働者たちは祖国から亡命し、異国でアイデンティティーを探し求める旅路にいます。

ジアド・クルスーム

Ziad Kalthoum

1981年シリア・ホムス生まれ。現在ベルリン在住。映画大学卒業。2009年に、クルド人女性グループを追った短編ドキュメンタリー『OH MY HEART』を制作するも、政治的な理由でシリア国内での上映が禁止された。2010年、シリア政府軍に徴兵される。2011年、デモ鎮圧のため派兵されたダマスカスでデモ隊が兵士に殺されるのを目撃する。2012年、シリア内戦が激化していくなか、初の長編映画『THE IMMORTAL SEARGANT』を制作し始める。本作品は2014年ロカルノ国際映画祭でプレミア上映され、英国国营放送が主催する“BBC Arabic Festival 2015”で最優秀長編ドキュメンタリー賞を受賞する。自国民同士の殺し合いに加担する事を拒否し、2013年に政府軍を抜けベイルートへ亡命し『TASTE OF CEMENT』の撮影を始める。2017年に完成した本作品は、世界60カ国100以上の映画祭に招待され、2017年ヨーロッパ映画賞、2018年ドイツ映画賞へのノミネートのほか、世界30以上のタイトルを受賞する。





D O P ' s I n t e r v i e w

撮影監督：タラール・クーリ | インタビュー

Q 本作品の撮影のコンセプトを教えてください。

A ビジュアルコンセプトは被写体を固定で垂直に撮影することでした。ベイルートで生まれ育った私は、この街が内戦で破壊され尽くされ、90年代から今日まで続く急速な復興を目の当たりにしています。豪華なビルが建設され煌びやかな街の背景には暗い歴史があります。この垂直にそびえ建つ建物は一つの穴を境界線にし、上下で異なる二つの世界を撮影することを心がけました。

Q 初めて中に入る建設現場をどのように撮影しようと思いましたか？

A 撮影前、参考になりそうな建築写真をインスタグラムで眺めたり、“それらしい”画像を携帯に保存していました。いざ建設現場の中に入り、ファインダー越しに建物を覗くと、それらイメージは全て意識から消え去り、生き物のように音をたて、呼吸している建物が目に飛び込んできました。その瞬間、携帯に保存していた止まっている写真を全て削除しました。

Q 監督のジハード・クルスムと音楽コンポーザーのアンサー・フレリヒスと並び、スク립トライターとしてもクレジットされていますがどのような役割を果たしましたか？

A 監督のジハードと音楽コンポーザーのアンサーとは2年半一つの映画を作るためにディスカッションを重ねました。撮影現場でも常にお互いの意見やアイデアを出し合い挑戦と失敗を重ね、度重なる挫折も乗り越えました。彼らはプロとして尊敬するパートナーであり親友たちです。そんな彼らと名前を連ねる事を誇りに思うのと同時に、監督としてのジハードの心の広さに敬意を評します。

Q 水たまりに反射する映像を多用していますがそこには意図がありましたか？

A 水を使い視覚的に反射させる映像は簡単に撮影できます。私たちがあの映像で表現したかったことは、ただシンメトリーに美しい映像を撮りたかったのではなく、労働者が感じている世界の矛盾を撮りたかったのです。水たまりに反射する映

像は一見美しく見えますが、よく見ると反射されている世界は歪んで見えます。労働者の美しい目に反射して映る映像が、歪んだ戦争のイメージであるのと同じです。

Q 制限のある撮影現場で多様なショットを撮影していましたがどのような工夫がありましたか？

A 幼少の頃ジャングルジムを必死に登っていたように、あらゆるところに登り撮影をしていました。オープニングの映像はドローンを使いましたが、それ以外のビルのエアリアル撮影は、屋上に設置されているクレーンにカゴを取り付け、そのカゴに乗り込み40階の高さで宙に吊るされ強風と戦いながらステディーショットを撮りました。

Q ミキサー車にウェアラブルカメラをつけて撮影したショットの意味を教えてください

A ジハードは映画の最後にベイルートの街の映像を入れたいと言っていました。シリア人を奴隷のように扱うベイルートの社会をどのように美しく撮るか悩みました。撮影最終日、日曜日の朝にカメラを装置したミキサー車でベイルートの街を走り美しい街を眺めました。矛盾した街を逆さまに撮ることに成功しました。

タラール・クーリ

Talal Khoury

レバノン生まれ。英ボーンマス芸術大学卒業。カメラマンとしてキャリアをスタートさせ、劇映画、ドキュメンタリー問わず数多くの受賞作品に携わる。自身が監督を務めた短編作品『August 9』は2009年ドバイ国際映画祭で最優秀賞を受賞する。撮影監督として携わった『Tadmor』(2016) はスイスのヴァン・デュ・レールで2部門に渡り優秀賞と審査委員特別賞を受賞、『Panoptic』(2017) はロカルノ国際映画祭で優秀賞を受賞、『Martyr』(2017) は第74回ベネチア国際映画祭に正式出品を果たす。最新作『セメントの記憶』ではボストン国際映画祭で最優秀撮影賞を受賞する。2018年10月にアカデミー賞外国語映画部門ノミネート監督、Byambaa Davaa (モンゴル) の新作『Veins of the world』の撮影を終了させる。



Crossing Border

Ziad Kalthoum and Shingo Ota

(『セメントの記憶』監督)

(映画監督・俳優・演出家)

【対談】 ジアード・クルスーム × 太田信吾

2018年11月15日、監督のジアード・クルスーム氏が映画祭に参加するため滞在していたドイツ中部の都市・カッセルで行われた。

Z 今日カッセルまで来てくれてありがとう。ドイツでは今、何を
しているの？

O エッセンの劇場で演劇作品の演出をする仕事のために滞在
してるんだ。今暮らしてるエッセンからここまで電車で3時間く
らいだったよ。

Z なるほど。

O 「セメントの記憶」の日本での劇場公開が決まったという
ことでおめでとう。どんな経緯で決まったの？

Z メインで配給を担当しているアレクサンダーが動いてくれたん
だ。彼が最初、映画を日本で公開したいと言った。8ヶ月前
くらいかな。正式に決まったと聞いて、とても嬉しかったし楽
しみだよ。

O 「セメントの記憶」は既に2回観てるんだけど、猛烈に心が
動かされたよ。戦争による破壊と国家再建のための建設、そ

の狭間で人権が無視された過酷な状況にもかかわらず生き
る労働者たちの姿に、問いかけられた気がするんだ。この
映画を観たあなたに何が出来る？

Z 「セメントの記憶」の登場人物たちは孤独を抱えた人物
だ。現代の奴隷制のような状況を生きている。彼らの生きる
状況を描いたこの映画から何か伝わったなら嬉しいよ。

O 「セメントの記憶」が描いている背景のことを教えてくれるか
な？

Z 15年に及ぶレバノン内戦（1975–1990）を経てレバノンでは国
の多くが破壊された。その再建のために戦後、シリア人労働
者が招かれたんだ。これらの労働者たちは奴隷のように扱
われている。僕にとって疑問だったのはシリア人労働者た
ちがどのように国を再建してゆくのかということ。それから彼
らは祖国で始まったシリア内戦（2011年–）で同時にシリアの家
を失っている。どこかに建物を作ると同時に彼らは家を失っ
ているというコントラストがあってそこに僕は興味を持った。

彼らが置かれている状況は過酷だよ。保険もない。19時以
降は出歩く権利もない。シリアの家について話すことも許さ
れない。完全な沈黙、完全な権利の剥奪がそこにはあった
んだ。その状況を伝えることに意味を感じたんだ。なぜなら
今、多くの報道はシリア国内の対立を伝えることに傾きすぎ
だと感じているから。どれだけ権利が剥脱された過酷な状況
で奴隷のように扱われていても建設というポジティブな行為
を行っているシリア人たちのことを伝えることが大切だと思っ
たんだ。

O 僕は創作をする上で”当事者性”はとても大切なキーワー
ドと考えているんだけど、あなた自身の日常にも戦争はと
ても身近なものとしてあったんだよね。

Z うん。この「セメントの記憶」のプロジェクトが始まる前、僕は
軍隊の兵士としてシリアにいたんだ。戦争が始まるとシリア人
は1年半、兵役を努めないといけな。10年くらい僕は兵役
から逃れてきたけれど、2010年に僕は捕まって兵役に送られ
たんだ。そして1年後の2011年に内戦が始まった。戦車で街
が破壊されていく。派兵されたダマスカスでデモ隊が兵士に
殺されるのを目撃する。いつの間にか戦争の音に囲まれて
いる自分に気がついた。それで僕は前作の「The Immort
al Sergeant」という映画を作ったんだ。兵役中の自分の日
常を描いたパーソナルな作品だよ。朝から夕方まで兵隊とし
て働いて、夕方から次の日の朝まではシリア人映画監督の
助監督として働く日々だった。その日常を描いた。

O シリアで生まれた後、移住の経歴を教えてください。

Z 僕はシリアのホムス出身だ。最初にシリアで破壊された街だ
ね。そこで高校まで卒業した。そのあと、19歳くらいのときか
な、ヴォルゴグラード（スターリングラード）で映画の勉強を始
めた。この街も第二次世界大戦中に破壊し尽くされた街だ。そ
のあと、シリアのダマスカスに戻って助監督として働き始め、
10年くらい過ごした。そして2011年に内戦が始まって僕はベ
イルートに逃れた。ベイルートも破壊された街だよ。それで
今はベルリンに住んでいる。僕が移住したこの4カ国の都市
はすべて似た境遇をたどっている。どの街も破壊され尽くされ
た。僕はこの円から逃れる時だと考えている。

O 「セメントの記憶」のプロジェクトはどうやって生まれたの？

Z 兵役のあと、僕は8ヶ月間、ダマスカスにいてそのあと戦火を

逃れてベイルートに移った。ベイルートに到着した時に、シリ
アでは戦争の音に囲まれていたのが、いつの間にかここ
では建設の音に囲まれているのに気がついたんだ。レバノン
では内戦が終わった1990年から現在に至るまで、復興のため
の建設ラッシュが続いている。僕はこの二つの都市の対照
的な音の違いに気がついたんだ。戦争の音と、建設の音。
調べると約100万人のシリア人労働者がレバノンの建設現場
で働いていた。戦争の音と、建設の音の間に、あるいは破
壊と再生の間に、この建設現場の中にどんな人がいるのだ
ろうかと考え始めた。

O 今作の「セメントの記憶」も前作の「The Immortal Sergea
nt」も、ジアードの作品では一貫して、音がとても大切な役割
を果たしているよね。

Z 音や音響は一人の登場人物と言ってもいいくらい大切だと
考えているよ。古典的なドキュメンタリーでよくあるようなインタ
ビューとか、出演者が自分の人生について語るとか、そいう
手法を採らずとも、音の設計によって台詞や言葉なしに心
情が想像ができると考えている。

O 撮影に入る前に構成は考えていたの？

Z システムの視点から映画を作ろうと試みた。そのシステムに
は名前も経歴も歴史もなく、それでもそこには多くの労働者
がいて24時間、ともに時間を過ごしている。起きるのも働きに
行くのも寝るのも食べるのも常に一緒。ブラックホールのような
場所で彼らは過ごしていて決して外には出られない。地下
から屋上、屋上から地下、その移動を繰り返す毎日。その
生活のサークルを知って僕はハムスターみたいだと考えた。
彼らは仕事を終えて地下に潜ると彼らの祖国や出身地、家
族や友人の近況についてテレビや携帯で調べ始める。屋
上に仕事に出ると、彼らは建設の音に囲まれる。この上下
の移動が僕の映画のストーリーになると考えた。屋上に登る
と海が見えるけれども、彼らはそこに行くことも許されない。あ
る日、屋上で労働者にこの風景と自分との関係に尋ねたら
しばらくの沈黙の後で「壁紙と一緒にだ」と答えたんだ。なぜ
なら彼は外に出れないから。これは刑務所にいる囚人と一
緒だ。窓はあるけれど、外には出れないから。そういう意味
で風景は彼らにとって壁紙と一緒になんだ。このことからボイス
オーバーを使うというアイデアが閃いた。

O 構図が確かに絵画的だと感じたよ。

Z 出演者が話してくれた風景が壁紙にしか感じれないような状況を追体験して欲しくて、撮影監督と、撮影を工夫したよ。この作品の映像はほとんどが固定ショットだ。建設現場ではミリ単位の厳密な設計と組み立てが求められるよね。映画でも同じように画面を構築したいと考えたんだ。シリアのシーンに関してはそれとは対照的だ。街は全て破壊され、人々はセメントまみれになって瓦礫から這い出てくる。カメラは神経のように動く。この対照的なカメラの構図や動きが映画に効果をもたらし得ると考えていた。

O 登場人物たちとはどうやって関係を築いたの？

Z とても難しかった。ビルに入る許可を得るために1年待った。誰も撮影のカメラが入ることを歓迎する人はいないからね。僕は三人、ラインプロデューサーを交換したよ。最後の一人が女性だったんだけど、現場のオーナーと個人的な関係があつてようやく許可をもらうことができた。ただし、10日間という条件付きでね。映画製作者ならわかると思うけど、10日間は1本の長編映画を作るのにとても短い期間だよ。でも僕は根本的な発想を変えたんだ。最初はオーソドックスなドキュメンタリーに做って一人の人物を追いかけて撮影する手法を考えていた。でも建設現場に入った時、その光景に僕はここに現代の奴隷制があると感じた。皆、疑い深く、労働者たちはそもそも僕のことを知らなかったから当然だよ。僕のカメラがどこに帰属するものかも知らないわけだから。大半の人はカメラをプロパガンダのために使う。それが主流になっているから、僕らが彼らの信頼を得るのはとても大変だった。



O どう乗り越えたの？

Z このカメラは誰にも帰属しないと話したよ。あくまでも僕のものだと。単にあなたたちの生活に焦点を当てるといふ狙いのために使うと。そんな風にして信頼関係を少しずつ構築していった。次第に彼らは僕に協力的になっていったし、生活空間にも入らせてもらえたり、アイコンタクトをしたり。

O 撮影はどうだった？

Z 人生で最もタフな10日間だったよ。僕らは建設現場のクレーンに取り付けられる特殊なカゴなどの特権を撮影に導入していた。クレーンにカゴを取り付けさせてもらい、そのカゴに乗り込んで40階くらいの高さで、強風と戦いながらステディーショットを撮ったんだ。クレーンが揺れると機材も揺れたり、大変だった。

O 制作のためのバジェットはどこから確保したの？テレビ局とか？

Z いや、テレビは座組みに入れられなかった。映画を作る上で、彼らは大きな問題だよ。彼らは金を出す代わりにルールを押し付けてくる。このシーンを変える、とか言ってくるし。僕の映画を見たらなぜ誰も喋ってないんだ？と言うだろうね。彼らは無言に耐えられないんだ。個人的な資金や助成金など、ルールを押しつけられないで済む予算を確保したよ。

O 編集ではボイスオーバーがとても印象的だった。匂いの記憶を巡るストーリー。あのテキストはジハードの個人的な体験？

Z いや、建設現場から見える景色が壁紙と一緒に話してくれた労働者の話からインスピレーションを得て、そこからフィクションの物語を作った。最初はボイスオーバーも使わずにサイレントで行く予定だったんだ。でもそれではフェアじゃないと思った。なぜならあのビルの中で彼らは話すことも許されていない。でも僕の映画では彼らはあのビルの中で感じた思いをシェアすることができる。彼らの実話に基づいた物語を語ろうと思ったんだ。

O 映画の冒頭で労働者の男が幼い頃に自宅のキッチンで見た海の絵の記憶を語っているよね。彼はその絵を見て海の中に飛び込むことを妄想している。それは彼のゲームだった。そして映画の最後にシリア内戦が始まった後、また彼は絵と

向き合う。でも後半の方では同時にその時彼はバイルートの海にも向き合っているんだよね。繰り返す歴史のサイクルを考えた構成になっていると感じたよ。

Z この映画の中ではレバノンで働く2世代に渡るシリア人について語っているよ。まず1990年にレバノン内戦が終わってレバノンに招かれたシリア人労働者の世代。それが第一世代。第二世代も父の世代と同じ人生を辿ろうとしている。ただ、第二世代が違うのは祖国が内戦で戦火に塗れているという状況だよ。ボイスオーバーの主体は倒壊した瓦礫の下でセメントまみれになって埋もれている。彼がレバノンに逃げ出した時、その地下室もまた違った形でセメントにまみれていることに気づいた。レバノンの地下室もまたセメントまみれだったんだ。この二つの対比を描きたいと考えた。レバノンではセメントは水と混ぜられ建築資材となる。シリアでは空爆後に家屋が倒壊しセメントは粉塵となって宙を舞う。レバノン内戦時代の戦車は今、海中に沈められている。方や、シリアでは破壊のために新たな戦車が配備されている。この戦車を巡る対比も通じて、レバノンとシリアの状況の違いを描きたいと考えていた。あたくも仕事を終えたかのような戦車と新たに仕事を始めた異なる戦車。でもこれはシリアだけじゃなく世界のどこでも起こりうる状況だと思う。戦争と建設という行為は常に表裏一体だよ。

O 映画を作ることでそんな状況に歯止めを掛けることができると思う？

Z 映画監督として、観客に目を覚まさせることは出来ると思う。正直に言うと、中東の人々にまだ民主主義が浸透しているとは考え難い。自分の考えをシェアしたり、議論をしたりといったような行為がまだまだ少ない。独裁政権のもとでは自分の意見を話したり、物事の本質を考えたりする権利が剥奪されてきた。沈黙、あるいは無を選ぶしかなかった。ご存知の通り、2011年に始まったシリア内戦は当初、アラブの春に影響を受けた、平和的な反政府デモを発端とするものだった。でも、その後は反体制派が周辺国からも入り乱れて過激派にとって代わられることで双方の対立が激化していった。報道されるのは軍隊についてのこと、イスラエルのことばかり。プロパガンダや主義主張で溢れていた。イスラエルに戦いに行くべきだ、とか。でも唐突に、これらの言説が、イスラエルにシリアへの攻撃を引き起こした。これまで約1000万人のシリア人が国外に逃れ、約100万人が死んでいる。約50万人が行方不明。このようなシリアの状況を想像できると思う。僕は



ドイツに4年間住んでいるんだけど、この国では人権について頻りに語られるよ。でもドイツは一方で武器を輸出してる国でもある。人権を語りながら武器をプロデュースしているんだ。シリアで使用される化学兵器の多くがドイツで製造されているよ。ヒトラー時代のガス室を今やドイツは国外に再び作っているんだ。なぜ今だに化学兵器の製造に興味を持ち続けるのだろうか。僕には想像がつかない。これが僕の疑問だ。映画を見てもらって観客のみんなと未来について語り合いたい。僕らに何ができるのか？ 武器の製造・輸出をまず止めたい。映画作家として僕にできることがあるとしたらこのような題材と観客との間に架け橋を作ることだ。映画を見て、家に帰った後、観客はたとえば投票などのさいに自分の未来を考えることができる。僕自身が世界を変えるのではなく、映画を見てくれた観客それぞれが世界を変えるんだ。第二次世界大戦についての映画は既に世界で2千本近く作られているけれど、戦争は終わったか？ いや、毎年のように各地で戦争は続いている。映画は映画だけでは世界を変えられない。観客が必要なんだ。彼らは世界を変えられる。

O なるほど。そもそもあなたはどのようにドキュメンタリーの制作に興味を持ったの？

Z 正直に言えばドキュメンタリーというカテゴリーには興味はないよ。僕が興味があるのは映画そのものだね。ある人はドキュメンタリーを作る、またある人はフィクションを作る、というけれど、僕にとっては共通の”シネマ”だ。題材によって撮影手法が決まる。僕の今作が映画と語る人がいればそれは撮影対象を撮影することが許された時間の制約が理由の一つだ。僕の映画文法は



劇映画に近いかもしれない。古典的な映画の文法とは違う。僕にとってルールは不要だ。文法は作れば良いし、異なる文法を混ぜても良い。古典的な手法で作品を作りたいのではない。一人の主人公を決めて照明の下でシリアの惨状を語って貰い、涙を撮るのは簡単だけど、観客を泣かせるのは僕の仕事じゃない。カメラで単に記録するのは簡単だよ。録画ボタンを押しさえすれば良いんだから。でも僕はもっとももっとも、対象の深いレイヤーに入り込んでいきたいんだ。なぜなら映画は観客を未知なる場所へ誘うものだから。今やどんな対象でもその対象自体について観客は既に知っていることが多いし、知らなくても容易に調べることができる。映画は情報ではないんだよ。誰もがアフガニスタンに行ってカメラを回せば映画は作れる。美しい映像や悲惨な現状の映像だけでは映画として十分じゃない。映画作家として大切なのは物語に何を加えるのか。自分自身の映像言語を構築したいんだ。それがいつも僕にとっての挑戦だね。毎年のように無数の映画が作られているけれども似たようなものばかりじゃないかな？

Q ジアードの考えに僕は賛成だよ。でもスタッフの共感是最初から得られたの？

Z いや、実はこの映画の製作を始めた時、プロデューサーは僕に反対した。メインキャラクターがいないとか。誰かが喋るシーンがないとか。古典的な手法に則って。でも僕は革命を起こしたかったんだ。映画作家としてアサド政権への抵抗だけが革命じゃないよ。まず作家としても古典的なものや習慣、慣習へ抵抗しないと。シリアでは深刻なほどに共通言

語が失われていると感じている。今、僕は新たな言語が必要だと感じている。それを作るのが僕の仕事だ。映画作家として観客を招き、新たな言語をシェアしたいんだ。僕に反対していたプロデューサーも、最初のラフカットを見て、僕のやりたいことを徐々に理解し始めたみたいだったよ。

Q 他のスタッフなどはどういう基準で選んだの？

Z 技術的に素晴らしい映像が撮影できる撮影監督を探すのは簡単だけど、僕はそういう技術者は探していない。どんな思想を持っているかがもっと大切だ。自分の経験からどんなことを映画に持ち込める人物なのか？ 撮影監督とサウンドデザイナーの人選は僕と一緒に仕事をする上でとても重要だ。多くの映画作家は音のことをあまり気にしないよね。クリアな音が撮れてれば良いというくらいにしか考えてない。僕にとってはサウンドは一つの登場人物と言っても過言ではない。言語のように扱うことができる。サウンドから語ることができる。サウンドから言語を構築することができる。サウンドをドキュメンタリーは時に無視するし無関心だよ。人が喋るシーンを映画的だと考える人がいるけれど、僕は違う。人が会話しているのを映画で見るのは苦痛だよ。1時間半もなぜ人が喋ってるのを見ないといけないんだ？ 題材が重要なのはわかるけれど、それが映画的だというのは僕にはわからない。

Q 『セメントの記憶』の制作中にドイツに移住したよね？ なぜ？

Z ベルリンはアーティストにとって過ごしやすい最高の街だから。ロンドンやパリと違って物価も高くないし。それにアーティストやフィルムメーカーのコミュニティもある。ただ時にタフでもある。常に戦争のことを思い出させるような街だから。道を歩いていてもいたるところにユダヤ人迫害の歴史を残す遺跡がある。戦争や迫害の記憶を思い出されるんだ。ここで暮らして居るドイツ人も辛いと思う。彼らの祖父母の世代の過ちについて自分が代わりに罪悪感を持ち続けなくてはならないから。今ではドイツはイスラエルを支援しているけれどイスラエルは多くのシリア人を殺害している。ナチスがユダヤ人にしてきたことと同じようなことをしている。同じような態度だ。大きな収容所を建設し、壁を作り、国を占領し、家屋を接収し、住民を国外に退去させている。なぜ？ なぜ同じことをするのか？ なぜドイツはイスラエルをサポートしているのか？ 一例だけで6ヶ月くらい前に2隻の潜水艦をドイツがイスラエルに贈ったんだ。記者がかつて僕になぜドイツに移住したの？って聞んだけど、あなたがたの国が僕の国に武器を送るからだって答えてやったよ。あなたの国が武器を送って置いて、なんで逃げたんだ？って聞く無理解さに呆れたよ。シリアで起きてることに無関心なのか？なぜイスラエルを支援するんだ？ 君たちの祖父の世代が過ちと同じことを犯している国を。人権について頻繁に語られる国ではあるけれどここでは武器も製造されている。難民を受け入れるとはいうけれど、同時にシリアのアサド政権に化学兵器を売っている。それで時間が経つとやはり難民はいらないという始末。僕らは



単なる物なのか？ヨーロッパの政治家には欺瞞や偽善を感じるよ。

Q ドイツでの暮らしはどう？

Z ヨーロッパには最低限、法律がある。権利がある。誰も奴隷のように過ごさなくていい。格差はあるけれどレバノンほどではない。レバノンの状況は300年前の奴隷制の歴史のようだ。ドイツがなぜここまで移民・難民を受け入れるのかといえば彼らは労働力が欲しいからだ。レバノンも同様に労働力を求めている。けれどもレバノンの状況は卑劣なものだ。ドイツでも難民の状況は厳しいけれど最低限の保障や権利はある。ドイツ人同様というわけにはいかないけれど。

Q 日本での劇場公開に向けた抱負はある？

Z 日本に行くのも最初だし、映画が日本で公開されるのも初めてだよ。日本も同じような境遇を辿った過去がある国だからね。突然、すべて破壊されて焼け野原になって。僕の関心は日本がどうやって戦後に復興を遂げていったのか、ということにある。いつかシリアも国を再建する時代がやってくると思うから。だから日本がどうやって立ち上がって、復興をしたのか知りたい。楽しみにしているよ。

2018.11.15



記憶のスカイライン

港千尋 | 写真家・映像人類学

スカイライン—高層ビルがつくる都市の稜線は、成長と繁栄のシンボルである。ニューヨークのマンハッタンに代表されるように、スカイラインはそれぞれの都市の横顔として親しまれているが、そうしたビルがどのようにして生まれるのか、わたしたちはほとんど知らない。輝く高層ビルは、いったいどんな人たちがどのように作り、彼らはどのように生きているのだろうか。この映画が焦点を定めるのは、高層ビルを作っている人間たちと、そのマテリアル、そして記憶である。

大空を舞う鳥のように都市を俯瞰しながら、カメラが迫ってゆくのはバイルート。その昔「中東のパリ」と呼ばれた美しい都市は、15年にも及ぶ長い内戦で徹底的に破壊されたが、内戦終結後に始まった都市再建を経て、現在はバブル経済真っ只中。海沿いには高層タワーマンションが立ち並び、いまも建設ブームに湧いている。カメラは地中に面した高層ビルの建設現場へと降りてゆく。クレーンが動き、ドリルが穴を開け、コンクリートが流し込まれる。どこでも見られる建設現場の風景だが、そこから展開されるのは、わたしたちの想像を絶する現実である。

ビルの地上階には台形の穴があり、そこを通過して労働者たちは現場へ入るのだが、同じ穴を通過して彼らは自分たちの住処に帰るのである。彼らは建設中のビルの地下の、まるで穴倉のような空間で生活している。しかも仕事が終わってからの夜間の外出は禁止され、光り輝く美しいバイルートの夜とは無縁の、まるで奴隷状態のような生活を強いられている。撮影の時点ですでに3年間も同じような生活が続いているという。

むき出しのコンクリート壁、天井には裸電球しかないような寒々しい地下室で、彼らが見つめるのはテレビと携帯電話。そのスクリーンに映し出されるのは、内戦で破壊し尽くされているシリアのニュースである。内戦でズタズタにされたバイルートの再建のために働いている彼らは、シリアからの移民や難民なのである。ビルの建設をしているまさに同時に、彼らの祖国はミサイルと戦車によって破壊されている。わたしたちが目撃するのは、破壊と建設が同時に進行する世界の現実である。

破壊と建設が同時進行する矛盾した現実を、ひとつのエピソードが支えている。ある労働者が憶えている、父親の記憶だ。レバノンの戦争が終わり、バイルートの再建が始まると、父親は他のシリア人と同じように出稼に出ていった。稼いだ金をもってた

まに帰ってくる父親の手は、コンクリートの匂いがしたという。その匂いは料理にもうつるくらいだったが、おそらく建設現場で働く彼らは全身にコンクリートが染み込んでいるのだろう。彼は稼いだ金で、家族のためにシリアに家を建てた。そしてそれら多くの家が、シリア内戦によって破壊されているのである。ビルの建設現場の匂いから、父親の手を思い出すシリア人労働者のエピソードは、「破壊と建設」がメタファーではなく、生身の人間の肉体において進行していることを暗示している。

ボイスオーバーで語られるエピソードは、どの労働者たちにも言葉ではとても伝えることのできない悲しみが充満していること感じさせる。彼らはスクリーンに向かってけっして口を開くことはないが、それはこの映画の核心にある目論見であろう。テレビのニュース映像のようなスタイルでは、外国人労働者たちの不平不満で終わってしまう。恨みを言葉にすれば、その言葉が元になって対立と殺戮が始まる。それが国民同士が殺し合ったレバノンであり、いまのシリアである。言葉ではなく、映像によってしか伝えられないこと。この作品は、目撃したからこそ言葉にできないという経験から、新しい映像言語を作り出そうとしているのではないだろうか。それは監督自身が、内戦下のシリアからバイルートへ脱出した亡命者だからでもあるだろう。彼はシリア革命が始まったとき、兵士として派遣された首都ダマスカスのデモ鎮圧で、市民が射殺されるのを目撃したという。

登場する男たちはみな黙して語らないが、印象的なのは彼らの眼差しである。ひとつの眼がスクリーンいっぱいクローズアップされ、その瞳に小さな携帯の画面が映っている様子さえ見えてくる。その眼差しの先にある現実を、地下の暗闇のなかにいるしかない彼らの心はどう捉えているのだろうか。

空爆で崩落したコンクリートの下敷きになった人々を、瓦礫のなかで捜索する緊迫した場面。すでに廃墟と化したアレッポの市街を砲撃する戦車。青い水平線に向かって伸びるクレーン。わたしたちの瞳に映るこれらの映像を、わたしたちはどのように語れるのだろうか。喪失と悲しみが練り込まれたコンクリートから、未来を作り出すにはどうしたらよいのだろうか。建物を作ることと記憶を作ること。伝えることをあきらめないこと。監督たちのチャレンジは、わたしたちに向けられたメッセージのように思える。

レバノンとシリア、戦災と復興の連環

松原康介 | 筑波大学システム情報系准教授（都市計画史）

父親が出稼ぎに出て、やがて自らも出稼ぎに出る。瓦礫の下敷きから逃れても、また別の穴に落ちる。言葉少なく淡々と進む本作から伝わってくるのは、レバノンからシリアへ、またシリアからレバノンへと、ひたすら往復を繰り返す破壊と建設、あるいは戦災と復興のイメージであろう。そこに託されたメッセージに迫るうえで、ここではその歴史的背景、特に都市の戦災復興の連環についてまとめておきたい。

現在のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエルそしてパレスティナを含む東地中海一帯は、古くからレヴァントと呼ばれるひとまとまりの地域であった。オスマン帝国の支配を受けた後、二つの大戦を経て現在に至るまでに、シリア、レバノンはフランス領、ヨルダンは英国領、更にイスラエルの建設とパレスティナの独立といった形で地域は細分化されてきた。その混乱と利害対立が、今日のシリア内戦にまで続く紛争の背景にあることは論をまたないであろう。

このうち旧フランス領となったシリア、レバノンでは、都市の計画が共通の行政的枠組みに置かれた。歴史は浅かったベイルートが、レバノンのみならずシリアの港として重要な位置を占め、イスラーム的な生活習慣に基づく細街路からなる旧市街を中心に発展した。しかし第一次大戦ではオスマン帝国に属していたため、イタリア海軍による艦砲射撃を受け旧市街は壊滅的に破壊されてしまう。1933年、フランス人都市計画家ダンジェが

中心となって考案した戦災復興計画では、旧市街を開削し、エトワール広場を中心とする6本の放射状街路網が導入された。沿道には、フランス風に装飾された柱廊とファサードを備えたアパルトマンが連続して建設された。19世紀のパリ改造に遡るフランスの伝統的な都市計画手法に他ならない。こうして旧市街は、さながらパリにおけるシャルル・ド・ゴール広場とシャンゼリゼ通りのミニチュア版である「ダウンタウン」として生まれ変わったのである。第二次大戦後の経済ブームに乗ったベイルートは「中東のパリ」と呼ばれ、日本からも多くの企業が支店を開設した。ここで参画した日本人の都市計画家が、清家清の高弟であった番匠谷堯二（1930-1998年）であり、拡大のさなかにあるベイルートの幹線道路網を更新し、ダウンタウンを保全しつつ市街地全体を構造化することを試みている。そこにはダマスカスへの歴史街道ダマスカス・ロードも含まれていた。

しかし、中央政府が弱く、宗教的、民族的にも多様で、またそれぞれの背景に諸外国との関係も深かったレバノンは、1975年より15年も続く激しい内戦に突入してしまう。ベイルートではダマスカス・ロードを境界線として東ベイルート（キリスト教徒側）と西ベイルート（イスラーム教徒側）に分かれ、激しい戦闘が繰り返された。またしても破壊し尽くされたダウンタウンでは、アパルトマンの最上階に巣食ったスナイパー達が人々をひたすら狙い続けている、というありさまであった。



1989年のターイフ合意（国民和解憲章）により内戦が終結すると、サウジアラビアで起こした建設会社を率いるラフィーク・ハリリーが復興に参画し、92年には自ら首相となって計画を推進した。こうした在外レバノン人には、往古のフェニキア人よろしく海外で成功した資産家が多く、その資金が大量に復興事業に還流したといわれている（余談だがカルロス・ゴーンもそうした在外レバノン人の一人である）。力をつけたハリリーは諸外国の影響を排除を目論むものの、2005年に暗殺されている。

ハリリー以降の都市計画のポイントは、ダウンタウン内ではほぼ完全に原状復旧型の復興を行い、モスクや教会を国民和解の象徴として再生する一方、その外側においては、最新の超高層ビルを中心とする、より投資志向の再開発を実施することであった。その結果として、今日のダウンタウンは物理的には往年の都市美を伝えてはいるものの、都市全体の中で見ると、まるで高層開発に取り残された空隙のようにさえ見える。また、ダウンタウンの外側にも存在した、スーク（市場）や港湾部、またキリスト教徒地区のアシュラフィーエなどの歴史的景観は、今日では急速にその姿を喪いつつある。番匠谷もコンサルタントとして参画し、空爆された日本大使公邸の再建に携わっている。

このように、ベイルートは少なくとも二度、大きな戦災を経験しており、その都市計画史は莫大な資金流入に狂奔した戦災復興の歴史であった。本作の舞台がベイルートであることの一つの意味は、聳え立つ超高層ビルの影に光を当てたことにあるだろう。いや、建設中である以上、ビルの影というよりは、夜間外出を禁じられた労働者が着工から竣工まで寝泊りを強いられる（日本の現場では安全衛生上からもありえない）、根切りされた地下

空間という「穴」といったほうが正確であろう。シリア人である主人公の父親と主人公が時間差をおいてともにベイルート復興の建設現場に立ったとすれば、父親の出稼ぎ労働はレバノン内戦直後からハリリーの復興事業の初期、主人公の労働はシリア内戦が開始された2011年以降の限りなく現在に近い時期、となる。主人公がいわゆるシリア難民であることは明らかだが、80年代のシリアもまた安定からは程遠かった以上、父親もまた何らかの理由で出国を強いられたのかもしれない。本作ではこの穴で働く労働者を、暗にシリアで瓦礫の下敷きになった人々に例えることで戦争に抗議しているようでもあり、あるいは作中の数少ない言葉を辿るなら、「戦争が母国を破壊し尽くすまで外国で待ち、終わったら再建のために国に戻る」という認識に、むしろ皮肉な諦観さえ込められているのかもしれない。確かなことは、これからアレッポを初めとするシリアの都市は、まさにベイルートの戦災復興が辿った道のりを辿らなければならないということである。このとき、シリア難民の帰趨もまた問われるであろう。

以上、本作はシリアとレバノンをめぐる都市の破壊と建設、戦災と復興の断ち切りがたい連環を活写した秀作であるといえよう。では最後に、本作と日本の私達をより結びつけるものは何であろうか。日本もまた復興大国である。古くは関東大震災からの帝都復興計画があるし、広島・長崎の平和都市計画、神戸や中越、そして東日本大震災からの復興と枚挙にいとまがない。開発と保全、労働者の人権、そして人々に残された記憶といった問題に私達がどう向き合ってきたかを想起すれば、きっと本作の描いたレバノン、シリアを身近に感じることができるのではないだろうか。

永遠というものがなくなった

宮本隆司 | 写真家

中東地域に戦乱が絶えない。宗教戦争、民族紛争が複雑に絡みあって人類の抗争の坩堝である。レバノンでは長い内戦があった。PLO（パレスチナ解放機構）、シリア、ヨルダン、イスラエル、アメリカ主体の多国籍軍が介入して15年もの内戦の結果、中東のバリと呼ばれた美しいバイルートの街は廃墟と化した。

その後ようやく復興し、今や建設ラッシュである。地中海沿いにはビルが林立し、道路には車が溢れている。だが復興建設と逆行するように、隣国シリアでは2011年以來、激しい内戦が続く。都市は破壊され100万もの難民がレバノンへ流入した。

この映画の監督ジャッド・カルソームはシリア難民である。難民労働者が働く工事現場を、難民同胞としてドキュメントした。独創的な手法を駆使して場面が展開する。深く静かに自らを語り、けっして声高に叫ばない。映像、サウンドのすべてが眼の覚めるように鮮烈である。

シリア難民労働者の現状を、これほどまでにリアルに伝える映像を、いまだかつて見たことがない。シリア難民労働者の眼から見た、レバノンの首都バイルートの高層ビル建設工事現場である。そこでは状況説明を一切しない。抗争に関する言葉が発せられない。宗教に関わる文言が語られない。ひたすら現場を撮影し、黙々と現場を見つめる。それだけに一層、映される画像が重みを増しリアルである。言葉では解決できない問題の根深さを感じさせる。

撮影場所は「午後7時以後のシリア人労働者は外出禁止」であるため、地下に閉じ込められた労働者の居住区と、昼間に働く鉄筋コンクリート高層建築の建設工事現場である。シリア人労働者たちはほとんど何も語らない。眼の前に見えるものを写し、そこで発する音響をありのままに伝えるだけ。それが現場である。テレビモニターから聞こえるニュース・アナウンサーの声が、わずかにシリアの現状を知らせる。他の音といえば、建設現場の機械音と壁をはつる削岩機の響き。鉄筋を切る切断音と落雷の稲光に爆撃音が溶け合う。建設の騒音に戦場の轟音が重なり合う。そこにシリアの戦場、爆撃現場の惨状がフラッシュバックする。

これらの現場を隔てる境界はない。あるのは爆撃で破壊された圧倒的な物量としてのセメント・コンクリートのガレキであり、建設されてゆく資材としてのセメント・コンクリート・ブロック、鉄

筋、生セメントである。地中海の青空と紺碧の海を望む画面から粉塵となったセメントが漂う。

隣接する二つの国にあって、一方では破壊し尽くされたセメント・コンクリートの死であり、一方では建設されてゆくセメント・コンクリートの生である。これは現代のシーシュポスの神話である。岩塊が変わって、セメント・コンクリートによる生々消滅が果てしなく繰り返される。

わたしは自然災害による建築物の破壊を撮影した経験がある。阪神淡路大震災や東日本大震災である。自然災害の現場に行くとき不思議なことであるが、不幸な状況で不運な巡り合わせであるにもかかわらず、リアルな現実感に満たされている。死ぬことと生きることが、今ここにあることを見せつけられる。身の周りの現実がリセットされ、すべての現象がそこで生々しく甦り消滅している。

わたしは戦場の破壊された建築物を撮った経験はない。映像で見た限りだが、自然災害とは違った様相を見せる。人間による破壊であることからくる憎しみや怒りがこみあげる。敵という人間が存在するからだろう。わたしの写真集『建築の黙示録』（1988年|平凡社）で撮影した建築の解体現場の様相とも明らかに違う。争いによる破壊と目的のある解体とでは、建築の変容の意味が違ってくる。

人間どうしの争いから出現する破壊の跡ほど見苦しいものはない。人間の愚かな行為だけが現れる。憎しみという感情が肥大して救いがなくなる。そこには自然の摂理を感じない。自然の摂理に抗う愚かな人間だけがいる。路上で歌う年老いた楽士が「永遠というものがなくなった」と嘆く気持ちがよくわかる。

現場と呼ばれる場に共通することだが、そこは様々な情報に満ちている。出来事が生々しく起こるため事実を冷静に理解するには困難がともなう。一方、われわれの日常はテレビ、パソコン、スマホの情報で、すべてを知っていると錯覚する。流れてくる情報を眺めることに追われ自らの現場を見失っている。生きて現在ある場を、かけがえのない現場と感ずることができない。

あそこでいったい何が起こったのか。この映画を見る者は、建設現場であり破壊現場、爆撃現場から眼を逸らすことはできない。このリアルな現場から逃げることはできない。





Staff

Director Ziad Kalthoum

Written by Ziad Kalthoum, Ansgar Frerich, Talal Khoury

Producers Ansgar Frerich, Eva Kemme, Tobias N. Siebert

Director of Photography Talal Khoury

Editors Alex Bakri, Frank Brummundt

Sound Design Ansgar Frerich

Composer & Sound Design Sebastian Tesch

Color-Grading Moritz Peters

スタッフ

監督：ジアド・クルスーム

脚本：ジアド・クルスーム、アンツガー・フレリッヒ、タラール・ケリー

プロデューサー：アンツガー・フレリッヒ、エヴァ・ケンメ、トビアスNジーベルト

撮影監督：タラール・ケリー

編集：アレックス・バクリ、フランク・ブラウムンド

音響効果：セバスチャン・テッチ

色調補正：モーリッツ・ペーターズ

2017年/ドイツ・レバノン・シリア・カタール・アラブ首長国連邦
アラビア語 / 88分

日本語字幕：吉川美奈子

宣伝アート：成瀬慧 (restafilms)

予告編ディレクター：遠山慎二 (restafilms)

配給：サニーフィルム

www.sunny-film.com/cementkioku

© 2017 Bidayyat for Audiovisual Arts, BASIS BERLIN Filmproduktion

セメントの記憶

Taste of Cement

2019. 3.23 (土) よりユーロスペースにて公開

A film by ZIAD KALTHOUM

A production by BIDAYYAT FOR AUDIOVISUAL ARTS & BASIS BERLIN FILMPRODUKTION in co-production with ENJAAZ

Supported by DOHA FILM INSTITUTE THE ARAB FUND FOR ARTS AND CULTURE Produced by ANSGAR FRERICH EVA KEMME TOBIAS N. SIEBERT

Editors ALEX BAKRI FRANK BRUMMUNDT Director of Photography TALAL KHOURY Composer & Sound designer SEBASTIAN TESCH Sound Design ANSGAR FRERICH

Color Grading MORITZ PETERS Written by ZIAD KALTHOUM ANSGAR FRERICH TALAL KHOURY Directed by ZIAD KALTHOUM

